

第八部

明日への期待

国土空間の新しい未来像を求めて四全総展望作業の中から国土庁編集の『日本、二十一世紀への展望』の一節を、基本的な見方、理解の原点として考えてみたい。

二一世紀に向けて、世界の人口は、人類がかつて経験したことのない速度で急速な膨脹を続けている。国連の推計によれば、一九五〇年の二五億人から一九八〇年には四四億人となった世界人口は、二〇〇〇年には六一億人、二〇二五年には八二億人に達し、四五年間ではほぼ倍増するものとみられる。このような人口増加のほとんどは発展途上地域において生ずるものであり、これらの地域の消費水準の向上と人口増加の速度を考慮すれば、食糧、資源エネルギーなどをめぐる世界の需給バランスを変える可能性の高い時代へと移りつつあるとみられ、二一世紀には地球規模の環境問題が深刻化するおそれがある。このような需給バランスの変動に伴うあつれきや自然のバランスの変化を回避するためには、世界各国が長期的な視野に立ち、地球規模で協調していくことがますます重要になってこよう。

二一世紀に向かう地球社会は、発展途上国の人口爆発に伴う人口の急増と都市問題の深刻化、不安定なエネルギー

ギー、食糧問題、地球規模の環境問題などの厳しい局面を迎えることが予想され、これら諸問題に対応することとは、調和のとれた地球社会の発展のために極めて重要な課題であると考えられる。

一方、有史以来今日まで、豊かな物質文明の形成に大きな貢献を果たしてきた技術革新は、このような地球レベルでの制約条件のもとで経済社会の広範な分野で進展し、二一世紀の新たな文明を切り開いていく上で大きな役割を果たす可能性がある。

ところで、世界の文明は、時代時代によってその中心を変えてきている。近年、アメリカ大陸で西海岸地域の重要性が高まる一方、わが国をはじめとする西太平洋地域の発展は目覚ましいものがある。このように、経済活動の中心は、環大西洋地域から環太平洋地域へと移行しつつあるとみられるが、環太平洋地域は欧米の文明から東洋の文明にわたる異質で多様な文明が混在する活力に満ちた地域であり、高度な情報化と、省資源、省エネルギー技術、バイオテクノロジーなどの技術革新が進展するなかで、経済交流、文化交流が一層活発となり、豊かな心と生活を重視した二一世紀の地球社会の発展を支え

る新たな文明が、この地域で展開する可能性が秘められている。

わが国に目を転ずると、今後二一世紀に向けて高齢化が進み、人口の増勢鈍化のなかで二一世紀には世界でも有数の高齢化社会の到来が確実視され、わが国経済社会にプラス、マイナスさまざまなインパクトを与えることが予想されている。また、欧米先進国へのキャッチアップをはば終えたわが国は、今後世代の交代などに伴う価値観の多様化や文化志向の高まりなど、経済社会が成熟化に向かうなかで、その活力をいかして培っていくかが重要な課題となっている。

活力の保持のためには、公正で自由な競争が可能な社会システムの基本的枠組みを維持しつつ、これまで以上に³調達な精神の発展を支える教育や研究開発などに取り組むことはもとより、異文明との直接的な接触の強化という意味で、国際化の一層の進展を図ることが重要である。

わが国の世界に対する対応の変遷をみると、遣唐使の派遣や鎖国の例にみられるように、時代によって外向きの姿勢を強めたり、逆に内向きに転じたりしている。概

していえば、今日の時代は、高度成長の時代を通じて国際的な交流の機会が大幅に拡大し、最も国際的なつながりを強めつつある時代の一つであるといえる。今後とも、わが国が積極的に国際化を進め、それに伴う社会的、経済的コストを負担しつつ、真に世界に開かれた国家、世界に開かれた国土を形成していくことが、国民の活動の基盤としての二一世紀の国土を考えていく上で大きな課題となろう。

ここで「新しい農業の可能性」について視点をあててみよう。

わが国の農業は、高度成長期を中心とする経済の急速な拡大過程において、高水準な農地の⁴潰廃、麦類・大豆などの自給率低下、農業労働力の高齢化、第二種兼業農家の著しい増加などにみられるように、食糧生産のための基盤が弱まり、土地利用型農業部門での経営規模の拡大による経営構造の体質強化が遅れ、また農村地域では兼業化・混住化・高齢化などによる社会的な機能の低下や貴重な緑資源の減少、その管理の水準の低下などの問題が生じている。

他方、長期的にみた世界の食糧需給が、発展途上国を

中心とする人口の爆発的增加、新たな農用地開発の限界性などにより楽観を許さず、特に異常気象などに対するぜい弱性が強まるなかであって、わが国に対しても、世界の食料需給の安定に貢献することがますます求められよう。また国民からは、農業に対して、輸入との適切な組み合わせのなかで、良質の食糧をコストの通減をはかりつつ、非常時への対応を含めて長期にわたり安定的に供給することが要請されている。さらに、公的管理と農村社会の活力により、土地、水、緑といった国土の資源を良好に管理することが期待されている。高度成長から安定成長への移行や最近における農業内部の新しい変化は、農業がこのような要請にこたえるための条件を作り出しつつあるといえよう。

農業が太陽エネルギー、水などの永続的資源を有限な土地の上で効率的に利用する産業であるという特質は、二一世紀に入っても基本的に変わらないであろう。

しかし、現在その萌芽をみせつつあるバイオテクノロジや、発展・普及が期待されているエレクトロニクス技術などは、農業生産の効率性を飛躍的に向上させ、あるものは土地資源の有限性を緩和させる方向に働くこと

になるろう。すなわち、二一世紀に向けて大幅な進展が予想される細胞融合・遺伝子組換えなどのバイオテクノロジによる品種改良や、新しい病害虫防除技術の開発、コンピュータによる情報処理、ロボット作業機などのエレクトロニクス技術の栽培管理への応用などにより、農業の生産や品質の著しい向上が期待される。

これらの新しい技術は、食糧生産力を拡大する可能性を開くのみならず、農業を就業者にとって一層魅力ある新しい産業とする可能性を持っている。これらの新しい技術を大胆かつ合理的に取り入れる企業的な農業経営体は、高度な頭脳と進取の気性に富んだ青壮年層をそのなかに持つ農家、農業集団などであり、これらの人々が日本農業の担い手として成長していくことになるろう。

今後二一世紀にかけての農業構造の変化の潮流を展望すると、農業労働力の一層の高齢化による世代交代や利用権設定などによる農地流動化の進展などに伴い、農業構造は、先進的な経営体と生きがい的営農を志向するものとの分化が徐々に進むであろう。

わが国農業をこのような流れのなかに定着させることは、現在の動向を考慮すればやさしいことではなく、ま

た、国民のわが国農業に対する理解を深めることが必要であり、さらに、これらを推進していく上で、農業の基礎的手段である土地、水などの資源を量・質両面において確保することが重要であることはいうまでもない。

農地は、長期にわたる日本人の投資と利用の蓄積であるのみならず、将来の日本人の食糧の基盤ともなるものである。この意味で、生産性の向上が地力の減退などに結びつかないようにすることも重要である。

また、すでに述べたように、農業技術の開発、普及、農地流動化の促進、農業に意欲を持つ人々に対する積極的な支援、農村生活のための自主的な活動の促進などのほか、大規模農業を可能とする農業生産基盤の整備、情報化に対応した情報ネットワークシステムの整備などを進め、同時に、農業構造の変化を踏まえ、先進的経営体に焦点を合わせた農産物価格政策を講じていくことが、長期的には重要性を増すことになる。

鹿児島県は農業県であり畜産の主要県である。食糧の供給基地を県政推進の最も中心的な柱として推進がなされている。土地条件、気象条件は他に最も優れたものをもっている。要は創造性と協同の力、継続性であろう。

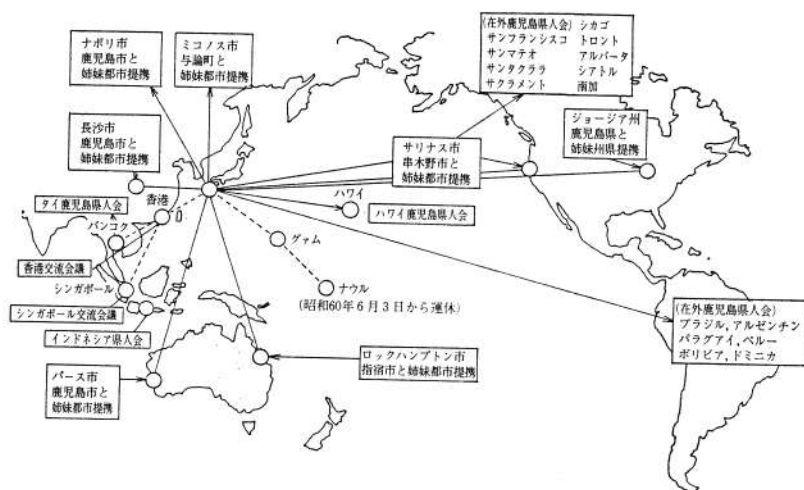
南の基点づくりをめざす総合開発計画は、二一世紀に向けて飛躍的な発展と住みよい環境づくりのため「活力とぬくもりにみちた偉大な鹿児島県の創造」を合い言葉に、それぞれが力を発揮することにより、その期待は大である。

わが町はその中で立地条件に恵まれ、優れた町民性を基盤として、心豊かな町、生産と創造の町としてその土台を築いてきた。その足跡は尊く評価も高い。しかし、時代は変遷する。せっかくの素材が新しい時代にふさわしい新素材として生かされ、さらに認識を高め、総合力を結集することにより、その価値は限りなく向上することであろう。「老年の知恵、壮年の創造と活力、若人の情熱」はその土壌となり、発展への原動力となる。

空港とともに生きる町、夢は大きい。空港の発展とともに南九州の中核をなす交通の拠点、やがて空港地下鉄の実現もこれまた夢ではない。空・陸交通の接点、人が動き、物が動く。まさしく経済活動の原則、原点である。

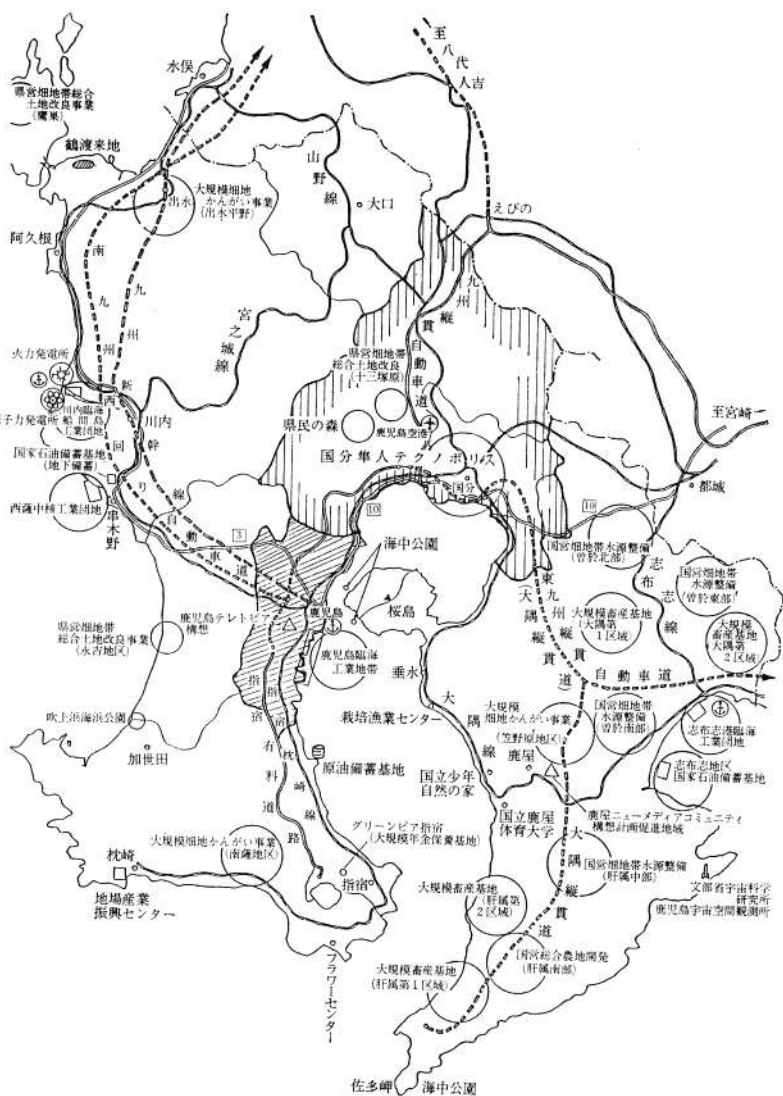
大いなる期待と可能性を秘めた「みぞべ」人をつくり、土をつくり、水をつくり、魂をつくり。

第53図 鹿児島県の国際ネットワーク



第54図 鹿児島県開発概要図





天皇陛下崩御

一 昭和六十四年一月七日午前六時三十三分崩御

(御在位六十二年 八十七歳八カ月)

一 平成元年一月三十一日 昭和天皇追号奉告の儀

一 平成元年二月二十四日 大喪の礼

一 陵所 武蔵陵墓地

一 国民の服喪 一般 一月七日・八日

官公署 一月七日から六日間

皇太子明仁親王御即位

新天皇即位（第二百二十五代）

一 承継の儀 昭和六十四年一月七日

（剣璽）（国璽）（御璽）

一 朝見の儀 平成元年一月九日

改

元

一新元号 平成

「内平かに外成る」 史記
「地平かに天成る」 書経

一 平成元年一月八日から施行（午前零時）

年

表

近 代 社 会 時 代				時代区分
昭 和 時 代				
鹿 児 島 県 知 事				県
37	金 丸 三 郎	36	金 丸 三 郎	
町 制 時 代				町
4	有 馬 四 郎	3	野 村 秀 男	
1971		1970	1969	西暦
昭和四六		昭和四五	昭和四四	年 号
○第一次県政発展計画策定（六月） ○日石原油基地発足（九月） ○衆議院議員総選挙（十二月） ●第三次佐藤内閣成立（一月） ○内之浦東大宇宙航空研、ラムダ4S五型人工衛星「おおすみ」と命名（二月） ○日本万国博覧会開幕（三月）九月十三日閉幕 ○新鹿児島空港起工式（三月） ○前町長岩下司馬氏、町及び農協合同葬（三月） ○溝辺町長選挙及び議員補欠選挙（五月） ○農村集団電話設置（五月） ○国鉄鹿児島本線全線電化（十月） ○町道陵南線新設 ○鹿児島県知事及び県議会議員一般選挙（四月） ○溝辺町議会議員一般選挙（四月） ○参議院議員通常選挙（六月） ○九州縦貫自動車道計画発表（六月） ○県営畑地帯総合土地改良事業基本調査着手 ○集団茶園一七〇設置 ○茶冷蔵庫第一貯蔵庫設置（六月） ○沖縄返還協定調印式（六月） ○九州縦貫自動車道着工（八月） ○溝辺町長期振興計画策定（八月） ○溝辺町地籍調査事業着手				国 ・ 県 ・ 町 史

近 代 社 会 時 代					
昭 和 時 代					
鹿 児 島 県 知 事					
金 丸 三 郎					
町 制 時 代					
有 馬 四 郎					
1973			1972		
昭和四八			昭和四七		

- 農業振興地域指定
- 町道上床線新設
- 町上水道給水開始（十二月）
- 自動電話開通（十二月）
- 空港県営駐車場管理委託開始
- 沖縄復帰（五月）
- 九州新幹線基本計画決定（六月）
- 田中内閣発足（七月）
- 国民体育大会（太陽国体）夏季大会（九月）
- 日中国交正常化の共同声明（九月）
- 天皇陛下、国民体育大会（太陽国体）に行幸、高屋山陵にご参拝
- 国民体育大会（太陽国体）秋季大会（十月）
- 第八回身体障害者スポーツ大会（十一月）
- 第三三回衆議院議員総選挙（十二月）
- ナウル航空路開設（十二月）
- 空港騒音対策移転工事開始（中野）
- 土地政策要綱決定（一月）
- 国民総生産名目二九〇兆五〇〇億円（一四・五割増）
- 町村土地開発公社溝辺町支社設立（三月）
- 石油値上げ（一一・九割）
- 陵南小・溝辺中防音工事
- ねたきり老人巡回入浴事業開始（九州第一号）
- 溝辺郵便局現在地へ移転（六月）
- 農協荒茶加工場完工（六月）
- 九州縦貫自動車道加治木～石峯間用地妥結

近代社会時代				時代区分
昭和時代				
鹿児島県知事				県
	金丸三郎			
町制時代				町
5 有馬四郎				
1975		1974		西暦
昭和五〇		昭和四九		年号
○溝辺町郷土史発刊（十一月） ○陵南小プール完工 ○九州縦貫自動車道吉田―加治木間開通（十二月） ○第二次石油・電力消費規制（一月） ○町上水道第二水源完成（三月） ○町総合グラウンド完成（五月） ○上床公園児童遊園地建設 ○溝辺町長及び議員補欠選挙（五月） ○参議院議員通常選挙（七月） ○くみあい食品（九州新進の前身）操業開始 ○台風一六号襲来（九月） ○日本の人口一億一〇〇〇万人突破 ●三木内閣発足（十二月） ○網掛川改修工事着工 ○金割池改修工事 ○十三塚原畑地帯総合土地改良事業着工 ○優良町として全国町村会から表彰（一月） ○十三塚原土地改良区設立認可発足（二月） ○溝辺小学校新築第一期工事完工 ○新幹線岡山―博多間開業（東海道新幹線昭和三十九年十月開業） ○鹿児島県知事及び県議会議員一般選挙（四月） ○沖縄海洋博覧会開会式（七月） ○第一回歩け歩け大会（青年団）				

近	代	社	会	時	代
昭		和		時	代
鹿	児	島	県	知	事
38	金	丸	三	郎	
町		制		時	代
有	馬		四	郎	

1976

昭和五十一

- 都市計画地域指定（九月）
- 陵南小学校第二次防音工事完了
- 鹿児島精機操業開始（十月）
- 林業構造改善事業着手
- 溝辺町民歌発表（十一月）
- 通産省不況脱出宣言（三月）
- 上床公園に桜二〇〇〇本植樹（日本さくらの会）（三月）
- 溝辺小学校新築第二期工事完工
- 溝辺小学校移転開始（四月）
- 鹿児島県で集中豪雨のためシラス地帯が崩れ三五人死亡（シラスの弱さが問題となる）
- 新千円札登場（七月）
- 台風一七号襲来（九月）≡農林被害三一・九三億二・三〇〇万円
- 天皇陛下御在位五〇年記念式典（十一月）
- 九州縦貫自動車道加治木―溝辺間（七・七^時）開通（溝辺鹿児島空港IC）（十一月）
- 福田内閣発足
- 農業公社牧場（酪農）設置
- 県道白石論地城線改良完工
- 網掛川改修工事（災害関連）完工
- 麓共同利用施設建設
- 町立歯科診療所開設（鹿児島大学）
- 町道石原丹生附線改良工事着工
- 溝辺小学校創立一〇〇周年記念式典（十一月）
- 松山積氏、名誉町民表彰（十一月）
- 衆議院議員総選挙（十二月）

近代社会時代				時代区分	
昭和時代					
鹿児島県知事				県	
39 鎌田 要人				三三	三二
町制時代				町	
有馬 四郎					
1978		1977		西暦	
昭和五三		昭和五二		年号	
国・県・町史					
○農協肉豚肥育センター建設					
○鹿児島県知事選挙（二月）					
○陵南幼稚園園舎完工（三月）					
○鎌田要人県知事就任（三月）					
○町結核予防婦人会、結核予防協会から表彰（四月）					
○県農村振興運動スタート（七月）					
○参議院議員通常選挙（七月）					
○西郷南州一〇〇年記念式典（九月）					
○溝辺小学校プール（ステンレス）完工（九月）					
○鹿児島大学歯学部開設（十月）					
○九州縦貫自動車道吉田―鹿児島間開通					
○家畜管理施設建設					
○葉たばこ共同乾燥施設建設					
○役場庁舎新築設計着手					
○学校給食センター新築移転					
○白蓮保育園開園					
○県民体操決まる					
○陵南（旧玉利）小学校創立一〇〇周年記念式典（十二月）					
○溝辺中学校第二期改造工事完了（二月）					
○県サンライフ運動始まる（四月）					
○県立農業大学校開設（四月）					
○活動火山対策特別措置法公布（四月）					
○溝辺町長及び議員補欠選挙（五月）					

○農協肉豚肥育センター建設

○鹿児島県知事選挙(二月)

○陵南幼稚園園舎完工(三月)

○鎌田要人県知事就任(三月)

○町結核予防婦人会、結核予防協会から表彰(四月)

○県農村振興運動スタート(七月)

○参議院議員通常選挙(七月)

○西郷南州一〇〇年記念式典(九月)

○溝辺小学校プール(ステンレス)完工(九月)

○鹿児島大学歯学部開設(十月)

○九州縦貫自動車道吉田―鹿児島間開通

○家畜管理施設建設

○葉たばこ共同乾燥施設建設

○役場庁舎新築設計着手

○学校給食センター新築移転

○白蓮保育園開園

○県民体操決まる

○陵南(旧玉利)小学校創立一〇〇周年記念式典(十二月)

○溝辺中学校第二期改造工事完了(一月)

○県サンライフ運動始まる(四月)

○県立農業大学校開設(四月)

○活動火山対策特別措置法公布(四月)

○溝辺町長及び議員補欠選挙(五月)

近 代 社 会 時 代
昭 和 時 代
鹿 児 島 県 知 事
鎌 田 要 人
町 制 時 代
6 有 馬 四 郎
1979
昭和五四

- 溝辺町役場新庁舎着工（五月）
- 県総合計画策定（六月）
- 農林省を農林水産省と改称（七月）
- 厚生省発表昭和五十二年の平均寿命 男七二・六九歳、女七七・九五歳
- 鹿児島高機電器溝辺工場操業開始（七月）
- 竹山ダム定礎式（十月）
- 円対ドルレート 欧米市場一七〇円台
東京市場一七八円五〇銭
- 林業構造改善事業完了
- 大平内閣発足
- 役場旧庁舎閉庁式（一月二十五日）
- 新庁舎で業務開始（一月二十九日）
- 県議会議員一般選挙（四月）
- 町議会議員一般選挙（四月）
- 町制二〇周年記念式典及び新庁舎落成記念式典（三月二十五日）
- 竹子小学校新築第一期工事（校舎）完成（三月）
- 特攻慰霊碑除幕式（四月）
- 町社会福祉協議会法人認可（四月）
- 鹿児島湾ブルー計画公表（五月）
- 県議会一〇〇年記念式典（七月）
- 衆議院議員総選挙（十月）
- 日豊本線（南宮崎―西鹿児島間）電化（十月）
- 青少年育成町民会議結成（十一月）
- 青少年育成の町宣言（十一月）
- 青少年の家建設

時代区分						国・県・町史
近代社会時代						
昭和時代						町
鹿児島県知事						
鎌田要人						西暦
町制時代						
有馬四郎						年号
1980						
昭和五五						国・県・町史
○鹿児島―グアム―ナウル定期航空路開設 ○町いらない運動展開(十二月) ○農協野菜集出荷施設建設(麓) ○農協茶冷蔵庫第二貯蔵庫建設 ○農協茶第二次加工施設建設 ○農協本所事務所及び関連施設、Aコープ完工 ○竹子小学校第二期工事(体育館)完工 ○九州縦貫自動車道溝辺―栗野間開通(三月) ○鹿児島―シンガポール定期航空路開設(四月) ○県青少年自立自興運動始まる(五月) ○東洋高圧機溝辺工場操業開始(五月) ○衆議院・参議院議員同日選挙(六月) ●鈴木内閣発足 ○徳之島空港ジェット機就航(七月) ○県少年の船(初三四名) ○丹生附地区水田圃場整備実施 ○鹿児島空港滑走路三〇〇〇尺完成(十月) ○ブラジル鹿児島県人会館落成(十月) ○心悦保育園開園 ○馬立集出荷施設建設 ○溝辺町商工会事務所開設 ○崎森地区公民館建設 ○竹子小学校創立一〇〇周年記念式典及び新校舎落成記念式典(十一月) ○広域基幹林道(加治木、溝辺、始良)長尾山麓線着工(十月)						

近 代 社 会 時 代			
昭 和 時 代			
鹿 児 島 県 知 事			
40 鎌 田 要 人			
町 制 時 代			
有 馬 四 郎			
1982		1981	
昭和五七		昭和五六	

- 鹿児島県知事選挙(二月)
- 世界人口四五億人台突破
- 九州縦貫自動車道鹿児島北―宮崎間開通
- 県水資源長期需給計画策定
- 竹子原畑地帯総合土地改良事業採択(六月)
- みぞべ温泉掘削着工(開発公社)(七月)
- 竹子土地改良区設立(七月)
- 町総合計画策定(昭56、65)
- 国立南九州中央病院開設
- 鹿屋体育大学開学
- パンコク航空路開設
- 梅田産業㈱鹿児島工場操業開始(九月)
- 共同募金溝辺分会、全国共同募金会長から表彰
- 大洋建材㈱鹿児島工場操業開始(二月)
- 玉利中学校を陵南中学校と改称、新校舎完工移転(四月)
- 鹿児島空港開港一〇周年記念式典(四月)
- 鹿児島空港国際線旅客ターミナルビル完成
- 町立歯科診療所閉鎖(四月)
- 鬼丸歯科医院開設
- 町営農研修センター開設(四月)
- 溝辺町長及び議員補欠選挙(五月)
- 特別養護老人ホーム「フラワーホーム」開所
- 始良地区農業共済組合事務所(溝辺)新設
- 栗中地区農業基盤整備実施
- 西原地区農業基盤整備実施

近 代 社 会 時 代		時代区分
昭 和 時 代		
鹿 児 島 県 知 事		県
鎌 田 要 人		
町 制 時 代		町
7 有 馬 四 郎		
1983		西暦
昭和五八		年号
○地籍調査事業基本調査完了 ○竹子青年会館建設 ○全国高等学校総合体育大会開催（八月） ○県、毎月第三土曜日を「青少年育成の日」と設定 ○国分隼人テクノポリス基本構想策定 「目指す太陽と海と緑の臨空国際産業都市」 ○ふるさと工業鹿児島営業所操業開始 ○梅雨前線豪雨県内（除奄美）被害大（七月） ○第一回溝辺ふるさと祭り（十一月） ●中曽根内閣発足 ○溝辺町内二三自治公民館発足（四月） ○鹿児島県議会議員一般選挙（四月） ○溝辺町議会議員一般選挙（五月） ○健康の町みぞべをつくる推進協議会結成（三月） ○参議院議員通常選挙（六月） ○県歴史資料センター「黎明館」開館 ○県フラワーセンターオープン ○木場地区水田圃場整備実施 ○町道石原丹生附線改良完了 ○増健の日設定（十月十日） ○陵南中学校プール完成（十一月） ○みぞべ温泉掘削完了（十二月） ○衆議院議員総選挙（十二月） ○日本人平均寿命（長寿大国） 男七四・二三歳、女七九・七七歳		国・県・町史

近 代 社 会 時 代			
昭 和 時 代			
鹿 児 島 県 知 事			
41 鎌 田 要 人		鎌 田 要 人	
町		制 時 代	
有		馬 四 郎	
1985		1984	
昭和六〇		昭和五九	

- 天皇陛下高屋山上陵にご参拝
- 天皇陛下溝辺町役場に行幸、ご昼食ご休憩（五月十九日）
- 第三十五回全国植樹祭（牧園・始良・溝辺）（五月二十日）
- 県民の森オープン（五月）
- 溝辺町老人福祉センターオープン（五月）
- 増健補導員の設置（三月）
- 陵南小学校増築（児童増）
- 重久歯科医院開設
- 地籍調査管理事業着手
- 洵上ダンボール㈱操業開始
- 国分単人テクノポリス開発計画の承認指定
- 川内原子力発電所一号機運転開始
- 新一万円札発行（十二月）
- 第三十八回全国レクリエーション大会
- 農協麓支所事務所、Aコープ空港前店建設
- 鹿児島県知事選挙（二月）
- 鹿児島ー高知間、日本近距離航空により路線開設（三月）
- 溝辺町総合体育館完成（三月）
- 上床公園キャンプ場完成（三月）
- 県情報センター（県庁内）開所（四月）
- 県新総合計画策定（昭60～69）
- 十三塚原畑かん営農計画策定（七月）
- 瀬間利廃棄物処理場オープン
- 竹山地区水田圃場整備実施
- 竹子小学校長住宅新築

時代区分	近代社会時代
県	昭和鹿児島県知事
町	鎌田要人町制時代
西暦	8 今吉衛有馬四郎
年号	1987 昭和六二
国・県・町史	1986 昭和六一
○故名誉町民松山績氏町葬（四月） ○町行政改革に着手（伝票会計） ○栗下池災害復旧事業 ○茶加工技術センター設置 ○肉用牛肥育実験センター設置（農協） ○かごしまの土地改良につどうタベ開催（十二月・東京） ○河内源一郎商店溝辺工場操業開始（一月） ○地籍調査管理事業完了 ○地籍調査事業完了式（四月） ○溝辺町長及び町議補欠選挙（五月） ○今吉衛町長就任（六月二十日） ○衆議院議員・参議院議員同日選挙（七月） ○桜島火山懇談会（東京） ○錦灘酒造（山元正明社長）溝辺工場でバイテク新焼酎「てんからもん」を発売 ○鹿児島で開催される国際火山会議のシンボルマーク決定（十二月） ○九州新幹線西鹿児島駅周辺環境整備事業起工式（十二月） ○溝辺小学校校舎増築（十二月） ○県人材育成センター開所 ○農村総合整備計画認定 ○第一回サンライフエアポート完走歩大会（三月） ○鹿児島県議会議員一般選挙（四月） ○溝辺町で第一回からいも交流（三月）	

近 代 社 会 時 代	
昭 和 時 代	
鹿 児 島 県 知 事	
鎌 田 要 人	
町 制 時 代	
今 吉 衛	
1988	
昭和六三	
○溝辺町議会議員一般選挙（四月） ○九州旅客鉄道株式会社（JR九州）開業（四月） ○竹山ダム湛水式（五月） ○溝辺町・横川町農協合併、始良中部農業協同組合として発足（五月） ○県農産物加工指導センター開所 ○溝辺町で第一回こぐま交流（七月） ○上床公園に斎藤茂吉歌碑建立（十月） ●竹下内閣発足（十一月） ○鹿児島県茶業大会（十一月於溝辺） ○県工業技術センター開所（隼人町） ○JR宮之城線廃止決定（一月） ○溝辺町金融機関指定（十月） ○陵南中学校教頭住宅新築 ○JR山野線廃止（一月） ○県甘藷対策本部設置（二月） ○HIロケット「さくら三号a」打ちあげ ○一般国道三号線鹿児島バイパス、九州縦貫自動車道鹿児島北―鹿児島、指宿有料道路三期完工開通式（三月） ○コミュニティセンター食堂・宿泊・売店業務休止（四月） ○テニスコートオープン（四月） ○総合グラウンド夜間照明施設改修（三月） ○農業航空事業推進協議会設立総会（四月） ○ドラゴン航空（鹿児島―香港）定期航空路開設（五月） ○国際火山会議開催（七月） ○西郷隆盛像空港前広場に建立（五月）除幕式（八月） ○陵南小学校体育館新築完成	

近 代 社 会 時 代			時 代 区 分
平 成 時 代	昭 和 時 代		県
鹿 児 島 県 知 事			
鎌 田 要 人			町
町 制 時 代			
今 吉 衛			西 暦
1989			
平成 元	昭和 六四		年 号
○竹山ダム小水力発電所完成 ○和太鼓導入「溝辺たかや太鼓」と命名 ○電算機導入 ○白蓮保育園増築 ○町道石原北原三号線改良完工 ●浩宮殿下高屋山上陵にご参拝 ○鹿児島県新奄美空港（ジェット化）開港（七月） ○木場地区水田圃場整備実施（八・六^〇） ○十三塚原畑総通水式 ○日本人平均寿命（七月厚生省発表） 男七五・六一歳、女八一・三九歳 ●竹下内閣改造（十二月二十七日） ●天皇陛下崩御（一月七日） ●皇太子明仁親王御即位 ○新元号平成施行（一月八日）			

〔初版の補完・修正〕

初版 昭和四十八年十一月三日発行

第一部 地誌編

第二部 歴史編（原始～近世）

第三部 歴史編（明治以降）

第四部 遺産編

第五部 新しい溝辺の夜明け（結び）

年表

初版発刊後、読者から寄せられた、補完または修正を要する記事は次のとおりである。なお、今回の補完または修正は、編集委員の調査により、その内容を確認されたもののみにとどめ、未確認または不確実なものは、今後の調査に委ねることとした。

頁	段・行	内 容
二四六	下 後十	旧海軍鹿屋航空隊を国分に訂正

三七〇	上 前九	ムラさんのおいを孫に訂正
三七一	下 前九の次に	壹岐萬兵衛、壹岐正彦、壹岐春記、村田経記を加える
三七一	上 前十	五十三名を五十七名に訂正
三九〇	下 前十一	中玉利英満を抹消
三九四	下 後三	杉山利を杉山利一に訂正
三九五	下 後一	溝辺十三塚原を国分第一基地に訂正
三九九	上 後九	初代岩元周左工門を加え、以下初代を二代、二代を三代、三代を四代に訂正、五代岩元真一を加える
三九八	下 後四	前方後円墳を円墳に訂正
四八四	年表昭和二	〔○天皇陛下には終戦御報告の為御名代として三笠宮殿下が高屋山陵に御参拝される（一二月三日）を追加
三五一	表上 後一	三九最勝寺良直を加来貞信に訂正
三九四	上 後	福永純、新村藤吉を加える。五一〇名を五一二名に訂正

(一) 青年学校の補完

青年学校については本町郷土誌初版三三四ページに記述されているが、本県及び本町における運用の特異性について補足して記述することにした。（二見剛史氏資料提

第 150 表 青年学校教授訓練科目およびその時数

普通科（男子）

（昭和10年4月1日）

	修 公	身 民	及 科	普 通 学 科	職 業 科	体 操 科	合 計
第 1 年		20		90	60	40	210
第 2 年		20		90	60	40	210

普通科（女子）

	修 公	身 民	及 科	普 通 学 科	職 業 科	家事及裁縫科	体 操 科	合 計
第 1 年		20		80		80	30	210
第 2 年		20		80		80	30	210

本 科（男子）

	修 公	身 民	及 科	普 通 学 科	職 業 科	教 練 科	合 計
第 1 年		20		50	70	70	210
第 2 年		20		50	70	70	210
第 3 年		20		90		70	180
第 4 年		20		90		70	180
第 5 年		20		90		70	180

本 科（女子）

	修 公	身 民	及 科	普 通 学 科	職 業 科	家事及裁縫科	体 操 科	合 計
第 1 年		20		50	110		30	210
第 2 年		20		50	110		30	210
第 3 年		20		50	110		30	210

供・三浦嘉久氏記述)

〔沿革〕 青年学校は昭和十年（一九三五）四月一日に公布された勅令「青年学校令」によって設立され、昭和十四年（一九三九）に義務制となり、戦後の昭和二十二年（一九四七）三月三十一日公布された「学校教育法」によって廃止された。青年学校は尋常小学校ないしは国民学校初等科を経て一九歳まですべての勤労青少年の教育の場として重要な役割を果たしてきた。

青年学校の前身は実業補修学校（明治三十二年「実業学校令」勅令第二九号）と大正十五年（一九二六）四月に発足した青年訓練所（勅令第七〇号）である。両者は、一般青年に対する国家の二大教育施設といわれる。

実業補修学校と青年訓練所とはその目的、生徒の年齢構成などを異にする制度であったが、両者はもとより市町村の経営であり、多くは小学校に併設され、職員も小学校長ならびに教師の兼務が多く、かつ生徒も重複するのが実態であった。

青年学校はそもそも実業補修学校と青年訓練所を統合して新設されたものであるが、前者の目的は、公民教育・職業教育であり、後者の目的は、心身の鍛練、つま

り教練を主にするものであった。これを統合した青年学校設立の趣意は「男女青年ニ対シ其ノ心身ヲ鍛練シ徳性ヲ涵養スルト共ニ職業及実際生活ニ須要ナル知識技能ヲ授ケ以テ国民タルノ資質ヲ向上セシムル」（青年学校令第一条Ⅱ勅令四一号・昭一〇）こととされ、実業補修学校、青年訓練所の目的機能を統一するものであった。

その目的を具体化した青年学校の教育課程は第149表の通りとなっている。

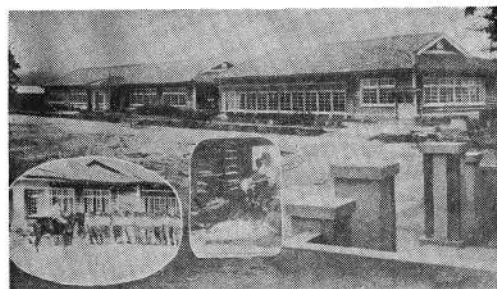
〔鹿児島県青年学校運営の特色〕 以上のような過程を経て、昭和十年青年学校は発足したが、時あたかも物情騒然たる内外情勢下であり、その受入れ態勢（校舎、教員等）は整わず、全国的にそのほとんどは、専用の校舎・専任の教員をもたず、いずれも小学校その他の兼用と兼任というのが実態であったが、古来青少年教育に重きを置く本県では、この青年学校教育を重視して、思い切った独自の運営がなされている。すなわち、昭和十六年（一九四一）五月に発刊された。鹿児島県青年教育振励会（当時は県庁内）編集の「躍進の青年学校」に次のように記述されている。

本県青年学校教育は、市町村当局、学校当事者並に一般県

第151表 鹿児島県の青年学校

(1941)

	本県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	沖縄県	全 国
面 積	km ² 9,104	4,940	2,449	4,076	7,438	6,334	7,739	2,386	382,545
人 口	万人 162	293	68	134	141	101	87	60	7,288
市 町 村	140	306	125	180	344	243	90	50	11,381
市町村平均面積	km ² 65	16	20	23	22	26	86	48	33.6
青 年 学 校	184	476	139	297	428	287	115	140	18,234
1町村平均青年学 校	1.3	1.6	1.1	1.6	1.2	1.2	1.3	2.8	1.6
専 任 校 長	111	33	14	7	8	10	42	—	441
専 任 教 員	1,292	1,148	664	655	750	532	461	42	27,881
1校当たり専任教 員	7.0	2.4	4.8	2.2	1.8	1.9	4.0	0.3	1.5
専任教員俸給(月)	円 63.85	62.51	55.72	53.00	53.05	49.00	60.80	47.40	56.66
1校当たり平均経 費	7,070	4,717	5,455	3,285	2,184	1,981	6,291	89	2,529
生 徒	59,640	110,805	33,719	55,706	64,066	34,340	40,031	19,910	2,786,042



溝辺村立青年学校

民の理解と努力と後援により極めて順調なる発展を続け、今や独立学校一―一校、専任教員一、三〇〇余名設備亦能く整ひ、経費も相当多く、実績も挙り県民衆望の中に生々発展しつつあり、今後は形式を整備すると共に一層内容の充実に勤め、「日本の将来は青年教育にあり、青年教育の成果は鹿児島より」の実を挙げざるべからず。

151表のとおりである。

「溝辺町青年学校」 溝辺町の青年学校については溝辺

町郷土誌初版三二四べ

ージに記述されている

が、昭和十六年五月鹿

児島県青年教育振協会

発行の「躍進の青年学

校」(二見源吾氏蔵書)に

収録されている溝辺村

立青年学校を紹介する

こととした。

郷土の特質と本校

一、彦火火出見尊を御

祀りする高屋山上陵

と往古御陵内に鎮座在りしと伝ふ鷹屋神社とを朝夕咫尺に拝し、霊峯高千穂を眼近く東に控へた此の聖域に八、〇〇〇村民の協力と当局の熱意により、青年学徒の修鍊場として建設されたものである。

二、往時国分八幡宮（現鹿兒島神宮）と宇佐八幡神宮と正八幡を争ひ、宮崎側の密使一四名が国分八幡宮を焼き、其の帰途次々に一三名迄が悶死し、其の塚を残すと伝ふ十三塚原の大台地もあって、全村農を以て生計し、古米産馬牛に名を得、稲、麦、藝苔、甘藷、大豆、粟等の普通作や木炭や茶も著名である。

殊に溝辺牛蒡の聞えが高い。故に本校は之等農事研究の先達とし、民心の融和修鍊の中核として、光輝ある地位と使命を負荷されて居る。

三、霧島山麓の僻村たるが故に、明治以降の忌避すべき思想の影響も無く、よく伝統の美風を堅持し、青年学校を絶對的に信頼支持し、以て村勢發展の源泉たらしめんとする村の熱意は独立二年後の今日予算を倍加し、紀元二千六百記念としての後援会発会式に幹部有志進んで一〇〇円以上の寄附金申込者十指に余り、一万円近くの淨財が集つたことによつても大勢が窺ひ知られるであらう。

四、皇祖発祥の地といふ誇と共に、忠誠を生命とした隼人の血を受けた吾人。今ぞ此の昭和の非常時に若き血を湧かす

べく、日々の鍛鍊に怠りはない。

生徒 男子二七八名、女子七〇名、計三四八名

職員 専任教員八名、兼任教員三名、講師六名、指導員四名

実習地 田二段一畝歩、畑一町一段二畝歩、果樹園二段

歩、桑園一段歩

予算 八、八三九円

(二) 竹子共正会改革外史

昭和二十三年五月三日新憲法の施行に伴い、日本の民主化体制改革が矢継ばやに実施され、一八〇度転換する新体制に国民は少なからず戸惑ひした。そのような中で、いわゆる民間団体である青年団・婦人会・大字団体などの民主化は、占領政策の至上命令にもかかわらず、その自主的改革は遅々として進まなかつた。

明治二十九年創設の竹子共正会もその例外ではなく、五十年來その支配體質（制）は変わらず、区民はただ無氣力に忍従してきた。このような封建的體質の民主化を、將來の發展策を模索する趣意をもつて、内外引き揚げ者・復員軍人・青年団員などの有志約二〇名をもつ

て、昭和二十三年竹子青壮年連盟を結成し、次のような目標を設定して運動を展開することになった。

1 目標達成期間 二年間

2 主要改革目標

① 民主的な会則を制定し、運営の民主化を図ること。

従来成文化した会則は無く、運営は若干の首脳陣の恣意によるもので、選挙制度も確立せず、会計監事も設置されず、相当多額な資産（山林など）財政運営について一般区民の知り得る手段はなかった。

② 会計（予算・決算）及び資産を公表すること。

以上のことを次期総会（昭和二十四年）に提案することになり、青壮年連盟（以下連盟という）では旧竹子消防会館（現竹子小学校正門前）を拠点として、おおむね週一回夜間参集して総会对策の戦略手段などについて討論研修を重ねるとともに、結果の強化をはかったのである。

さていよいよ二十四年三月共正会総会は招集された。

会場は旧竹子小学校講堂（木造の古校舎で講堂兼用であった）で、二〇〇名余の出席者で例年にない緊張した雰囲気の中で連盟は前記の提案を行い、ねばり強くその改

革を迫ったが、この時点ではまだ区民底辺の広がりもなく、問題提起という程度に終わったのだが、連盟の主張が認識され多くの共鳴を得たことが会進行中の雰囲気により充分察知され、次年度へのステップとしての手応えは充分であった。

連盟では以上のような経過をふまえ、次年度（昭和二十五年度）の実現を期して、総会对策を検討しつづ夜間の集会を続行して、強固な組織体制で総会に臨むことになった。

二十五年三月二十日共正会総会は召集された（結果的にはこれが解散総会となった）。会場は前年同様であるが、出席者はほとんど全会員で、三〇〇余名文字どおり堂にあふれんばかり。開会前から緊迫した雰囲気が漂っている。思うにこのことは、前年度総会における「改革案をめぐる応酬」の成り行きから、今年は何かが起こるという期待と好奇心によるものであろう。

さていよいよ開会が宣せられ、議事の進行に従って前年同様の提案を行い、激しい応酬がくり返された。双方譲らず会場は騒然となり、大勢は明らかに連盟側に傾いてきた。この予想外の情勢に動揺し、激怒した役員（共

正会執行部）は突如総退場したのである。これは予想しない事実上の解散である。正に青天の霹靂（へきれき）、この異常事態に会場はしばしば呆然（ぼうぜん）として声なく、やがて一般会員は退散した。

しかし連盟としては、ことの是非はともかく、事態收拾の責任があるとして、全員夕やみ迫るガランとした講堂に残留して、次のような現状分析のもとに事態收拾の行動をとることにしたのである。すなわち、共正会役員が退場したのは「二〇〇三〇代の若僧どもに理論敗北を喫したこと」と、「今の若者は口だけは達者だが実力はない。何ができるものか」という思いがあったに違いない。今こそ若者の意気と力を実証して信頼の回復を図らねばならないとして、その夜拠点の消防会館に参集し、次のような再建対策を立て全力をあげるようになった。

①二週間以内に再建総会を招集すること。

②青壮年連盟を發展的に解消し「竹子共正会再建対策委員会（以下再建委員会という）とすること。

③提出議案（会則その他）総会の準備運営などの企画はすべて連盟代表がこれに当たること。

この基本線に沿って以後毎夜のように拠点に参集して

行動を開始した。同志が最も危惧（きけん）したことは、若僧ども（連盟）の招集する再建総会に区民が応じてくれるかどうかということであったが、とにかく一日も早く再建を図らなければ……という使命感もあって、必死の努力により総会準備を整え、予定のおよそ二週間目の二十五年四月二日、再建委員会の名において総会を招集したのである。

さていよいよ当日となった。再建委員会（連盟）としては、会が成立するか否か？という不安と焦燥のうちに待機した。ところが、意外にもほとんど全員と思われる三〇〇余名の出席で再建総会はみごとに成立し、会場（前記小学校講堂）にあふれんばかりであった。この成果は大方区民が、若僧どもの主催する総会がどのように運営され、どのような結末になるか？という好奇心と、改革への期待感があって参集したものだと思われるが、ともかく再建総会はみごとに成立した。

総会はすべて連盟の若僧どもが運営に当たったが、格別の混乱もなく、予定どおり進行議事を裁決して、新会則により二十五年四月二日から再建発足することになった。こうして以後三十二年財団法人の設立まで運営され

たのである。

この再建総会以後、共正会は民主的に運営され、毎年の総会は盛会をきわめ、地区民の連帯感是一段と高まつて来たが、法人設立により区民の一堂に会する機会が失われ、薄れてゆく連帯感是否めない現況である。

ちなみに青壮年連盟参加者は次のとおりである。

新村藤吉、村田三夫、今村秀夫、神田司、岩切操、今別府操、佐藤（現福永）正人、野村行男、延時力蔵、岩沢典男、中久保春記（その他数名不詳、順不同）。

なお、この改革史は、竹子共正会史上、看過できないものとして補完するものであるが、残念なことに再建以来法人化までの経過記録は会則以外残されていない。したがって本項は筆者の記憶によるものであることを附記する。

（文責・新村藤吉）

編集後記

町制施行三〇周年を記念して、郷土誌発刊が計画された。本町郷土誌は昭和四十八年十一月三日初版が発刊されているが、今回はそれ以後約一五年間の動きを記録し、初版の続編とするものである。

昭和六十三年三月、役場を定年退職した私も、この事業のお手伝いすることになった。なにぶんにも企画力に乏しく、郷土誌の編集など専門的な知識も才能も全くない者、ずいぶん迷ったあげくのことであった。編集作業にはそれなりの苦勞もあったが、各機関・団体をはじめ、各位のご協力によって、ここに上梓にこぎつけた。

数カ月にわたる編集作業を通じて「記録・保存」し、「後世に伝える」ことの重要さと同時に、その困難さを知った。最近のように変動の激しい社会にあつてはなおさらのことである。本誌の内容については、まだまだ不備・不十分で、あれもこれもと思いながらも、不足する点多く、ご期待にそえなかったことをお詫びしたい。なにごとく「完全を追求はするが、完全はあり得ない」

ことをご理解頂き、ご寛容願う次第である。

本誌が広く町民の皆様にご愛読頂き、今後の溝辺町発展に、いささかでも貢献できるならば、編集委員一同望外の喜びである。

最後に、貴重な資料を御提供くださった方々、いろいろとご助言ご協力を頂いた諸氏に、深甚の謝意を表し、厚く御礼を申しあげ、後記とする。

平成元年四月一日

編集員（主筆）向井田 孜

〔郷土誌編集研究同人名簿〕

○編集委員長 有馬 四郎

○編集委員

・第一部長 新村 藤吉

委員 岩元 勝芳

〃 〃 飯屋園 静雄

〃 〃 上原 良喬

・第二部長 福丸 忠志

委員 岩元 保雄

〃 〃 村田 哲二

〃 〃 今吉 進

〃 〃 有村 久行

・第三部長 岩元 喜吉

委員 岩元 典男

〃 〃 野間トキ子

〃 〃 大人 一平

〃 〃 山口 隆治

○編集員（主筆） 向井田 孜

○事務局 社会教育課長（山口隆治） 森田 峯一

局長（野村定美・松山寿） 上村 茂

○調査研究員

井立田 定美

長野 武弘

重丸 紘美

森田 峯一

溝辺町郷土誌

統編一

平成元年四月一日 発行

編集 溝辺町郷土誌編集委員会

発行 溝 辺 町

印刷 第一法規出版株式会社

九州 支 社

正 誤 表

頁	段	行	誤	正	頁	段	行	誤	正
初編以後の首長、 議長									
五九	表		第九代町長 宗像	第八代町長 宗像	一九五	表下		最勝寺秀美	最勝寺秀美
一〇四	下前二		森田	森田	二二二	下後八		流域	流域
八七	上後七		一頁忠	一頁忠	二二四	下後三		民生市議員	民生市議員
九四	上前六		青年福祉会館	青年福祉会館	二四四	表		在宅	在宅
二八	下前七		厚五〇パーセント	厚五〇パーセント	二四九	下後一		有林 長左衛門	有林 長左衛門
三四	下二		耕土改良 広域林道	耕土改良 広域林道	二五三	表		鳥丸フヂ	鳥丸フヂ
三五	下三		溝小移転政策	溝小移転政策	二五三	表		鳥丸敏子	鳥丸敏子
五〇	上後七		戦時最初の	戦時最初の	二五三	表		杉山睦子	杉山睦子
六三	下後九		適格	適格	二五三	表		飯島園 恵子	飯島園 恵子
二〇	下前四		特上地帯	特上地帯	二五三	表		三・五メートル	三・五メートル
二九	表下		満庭 時政	満庭 時政	二五三	表		深求	深求
四〇	表		久木 元勉	久木 元勉	二五三	表		長野 政弘	長野 政弘
四〇	上後四		灌水	灌水	二五三	表		いよゝろが最後です	いよゝろが最後です
四五	表		農産部	農産部	二五三	表		丹生附	丹生附
四七	下前一〇		令長は溝町町の	令長は溝町町の	二五三	表		淡々として	淡々として
五三	表		土地改良区職員	土地改良区職員	二五三	表		日歴担任理事	日歴担任理事
五五	上後九		有村孝夫	有村孝夫	二五三	表		(各大字)	(各大字)
五七	上前六		有川寛英会所有者の	有川寛英会所有者の	二五三	表		教導	教導
五八	表		財政部委員	財政部委員	二五三	表		今 吉 衛	今 吉 衛
五九	下前六		宗像男	宗像男	二五三	表		今 吉 衛	今 吉 衛
六〇	上後一		徳水重幸	徳水重幸	二五三	表		今 吉 衛	今 吉 衛
六〇	上後一		徳水重幸	徳水重幸	二五三	表		今 吉 衛	今 吉 衛
七四	下前六		菅平 光雄	菅平 光雄	二五三	表		今 吉 衛	今 吉 衛
七五	下前六		野間 達夫	野間 達夫	二五三	表		今 吉 衛	今 吉 衛
八八	表		蒲生	蒲生	二五三	表		今 吉 衛	今 吉 衛





